

# 日本大衆文化における「腐女子」に関する一考察\*

金鎔均\*\*

kygyun@cau.ac.kr

徐慶元\*\*\*

agaru1004@hanmail.net

## <目次>

- |                |              |
|----------------|--------------|
| 1. はじめに        | 4.1「腐女子」の生態  |
| 2. 先行研究の検討と問題点 | 4.2「腐女子」の思想  |
| 3. 「腐女子」の定義    | 5. 「腐女子」の市場性 |
| 4. 「腐女子」の生態と思想 | 6. おわりに      |

主題語: 大衆文化(Popular culture), 腐女子(Fuzyosi), オタク(Otaku), 生態(lifestyle), 思想(ideology), 市場性(market value)

## 1. はじめに

「腐女子」という言葉が一般メディアで初めて取り上げられたのは、雑誌『AERA』(朝日新聞社)の2005年6月20日号の特集記事がきっかけであり、「萌える女オタク」という東京東池袋の「乙女ロード」の記事が組まれて以来、新聞やテレビなどでも本格的に「腐女子」が取り上げられるようになった。これは2005年に上映された映画「電車男」のヒットで話題になった「オタク文化」の延長線としてメディアが「腐女子」にも目を向けたためであると思われる。ところが、一般人の認識の中には「腐女子」と「女子オタク」を混同したり、単なる男性同士の同性愛を描いた漫画およびアニメが好きな女性という認識が根強いのは否めない。また、「腐女子」に関する先行研究も「ボーイズラブ」(以下「BL」と称する)や「やおい」に関

---

\* This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government (NRF-2012S1A6A3A02033580)

\*\* 中央大学校 人文大学 アジア文化学部 教授、交信著者

\*\*\* 中央大学校 博士課程、第1著者

1) 「やおい」とは、「腐女子」が愛好する作品のほとんどが直接的な性描写のみによって構成されることから、「やまなし」、「おちなし」、「いみなし」の頭文字を繋いでそう呼ばれるようになった。「やおい」

する分析や、「アイデンティティ」、「セクシュアリティ」のように特定の分野に限られた研究がやや多いと思われる。このような問題意識を持ち、本稿では視野を広げて「概念」、「生態」、「思想」、「市場性」といった四つの観点から「腐女子」に関する分析を試みることにする。具体的にはまず、いかなる人たちが「腐女子」と呼ばれるのか、その言葉の正確な概念を探ってみることにする。次に、「腐女子」と呼ばれる人たちの生態や思想を分析し、そのアイデンティティを明らかにする。最後に、日本大衆文化における「腐女子」の市場性とこれからの展望について分析してみることにする。本稿でのこのような考察は、比較的最近できてそれほど取り上げられていない日本大衆文化の一現象を分析するという点でそれなりの意義があり、「腐女子」の正しい理解にも貢献できると思われる。

## 2. 先行研究の検討と問題点

本稿で論じようとする「腐女子」に関する先行研究には、「腐女子」の恋愛観について考察した杉浦(2006a)、フェミニズムの視点から「腐女子」について論じた金井(2008)、「腐女子」のアイデンティティを可視化と不可視化の観点から述べた岡部(2008)、「腐女子」をめぐる言説の増加を一つの文化的現象とみなしてその経過を追跡したキムヒョジン(2010)、「腐女子」の性的自己決定について分析した田原(2012)、期待される「腐女子像」からのエクソダスについて考察した相田(2013)などがある。以下に各先行研究の主な内容をまとめてみることにする。

杉浦由美子(2006a)は、「腐女子」の恋愛観について考察した。一般人の認識では、「腐女子」は「BL」といった妄想の世界の趣味があるため、現実の男性に興味を示さないと思われるがちであるが、実際の恋愛や性生活は至ってノーマルかつ健全であると杉浦は主張する。また、「腐女子」は主な関心が妄想に向かっているため、現実の男性に対する欲求が低く、男女関係もほとんど円満であるという。杉浦の研究は、世間にそれほど知られていない「腐女子」の恋愛観を多様な角度から明らかにしたことが特徴であると言える。

金井淑子(2008)は、「腐女子」を「ウーマン・リブの精神」で読み込んでいる。つまり、「腐女子」の欲望が女性という主体にかかっていることを金井は焦点化している。また、金井は

---

という語の起源は、1979年の坂田靖子の主宰する漫画同人会ラヴリの機関紙『らっぼり』の誌の「やおい特集」とであるとされる。ちなみに、「やおい」と「BL」は「やおい=BL」と捉えてもあながち間違いとは言えないが、正確には「やおい」の中の一部としての「BL」である。

「やおい」はアニメや漫画のパロディとして知られる「オタク」的な趣味とみなされているため、「腐女子」が「やおい」を愛好するということは、「オタク」的な趣味に耽溺することにはかならないと主張する。金井はフェミニズムに「やおい」は「切って捨てられない」というが、そもそも「やおい」自体が「女子オタク」向けのポルノであり、フェミニズムを指向して描かれたり愛好されているわけではないと言える。金井の研究は、このようなことには触れていないのが問題点として指摘できる。

岡部大介(2008)は、「腐女子」がいかにアイデンティティを構築しているかを把握するため、主に「同人誌<sup>2)</sup>」などの創作活動を行っている人々を中心にインタビューや会話データを収集し、それを分析した。岡部によると、「腐女子」はアイデンティティを可視化するため、特有の文化的装置や言語的实践を遂行し、それを楽しんでいるが、それと同時に、普通の女性の実践に照らして「腐女子」としての実践を隠すことも行っているという。また、彼女たちは「腐女子」が社会的に普通の女性よりも下層に位置付けられると認識するが故に、「腐女子」であることを不可視化する場合もあるという。このような不可視化は「腐女子」にとってストレスとなるが、それは「腐女子」同士の自己卑下的、自虐的なコミュニケーションによって解消されると岡部は述べている。岡部の研究は、インタビューや会話データという生のデータを活用して「腐女子」のアイデンティティ構築について詳細に分析した点に意義があると思われる。

キムヒョジン(2010)は「腐女子」をめぐる言説の増加を一つの文化的現象とみなしてその経過を追跡した。考察を通じて「腐女子」の顕著化は男子「オタク」への注目の副産物であり、「BL」市場の拡大など経済的原因が大きく関わっているとキムは主張した。また、漫画『となりの801ちゃん』の成功は「腐女子」が自らを語るのではなく、あくまで他者である男性の目を通して語られているためであるとも述べた。キムの研究は「腐女子」に関する様々な談論を紹介し、具体例を通じて「腐女子」の思想を分析しようとしたことに意義があると思われる。

田原歩美(2012)は、性的自己決定権の観点から「腐女子」のセクシュアリティに関して質問紙を用いて分析した。分析の結果、調査に参加した「腐女子」は全員「腐女子」とは「BL」好きであると捉えており、一般女性とは趣味が異なるだけだと感じていたという。また、「腐女子」であることをオープンするかについては半数が「腐女子」であることを隠す傾向にあり、「腐女子」は自身の嗜好性を隠す傾向にあることが示唆されたと田原は主張した。最後

2) 「同人誌」とは、同じ趣味を持っている人たちが資金を出して作る「同人雑誌」の略語で、現在では「同人誌」=「漫画・アニメなどの二次創作物品」として使われている。

に、セクシュアリティについては全体として「腐女子」は自分が女性であることを受容し、性の多様性を認めていたという。田原の研究は、「腐女子」は性的自己決定権が高いものの、同時に自身が他者からバッシングを受けることに対して恐れを持つという、アンビバレントな感情を抱いているということを明らかにした点に意義があると言える。

相田美穂(2013)は、「腐女子」を考察の対象とする研究は極めて限られていると指摘し、金井淑子、前川直哉、武内佳代、吉末たいまつといった四人の論者の言説について分析した。相田は考察を通じて「やおい」、「BL」、「腐女子」の営みに焦点を当てて読み込まれた結果の再編成を試みた。相田の研究は、「腐女子」について論じた論者の言説の問題点を考察したことには意義があるが、「やおい」、「BL」、「腐女子」の「文化」としての側面には触れず、言及した論考の体系的な整理までには至っていないと思われる。

上記のような先行研究はそれなりの研究成果は認められるものの、「腐女子」に関する定義は全て曖昧な記述に止まっており、しかもそのほとんどがセクシュアリティの部分にフォーカスを当てているため、各言説から正確な「腐女子像」を抽出するのは至難の業であると思われる。このような先行研究の現状にかんがみ、本稿では既存の先行研究から視野を広げて「腐女子」の正確な概念から始まり、その生態、思想、市場性などについて考察し、考察を通じて明らかになった事実を基にして正確な「腐女子像」をまとめてみることにする。本稿でのこのような考察は、既存の先行研究では行われていないという点でそれなりの意義があり、これからの「腐女子」研究の資料としても活用されることが期待される。

### 3. 「腐女子」の定義

「腐女子」という言葉は、1990年代末あたりから誕生して2000年頃インターネット上の掲示板である「2ちゃんねる」を中心に本格的に使われ始めた<sup>3)</sup>と言われる。2012年5月、女優・北川景子の「宝塚にはまってしまい、普通の男の人が全然かつこよく感じられない。みんなこうやって腐女子になっちゃうのかな？」という雑誌インタビューの発言が話題になった。ところが、宝塚歌劇に熱を上げているという発言からして彼女は「腐女子」というよりもむしろ「女子オタク」に近く、これも「腐女子」と「女子オタク」の誤解から生まれたものであ

3) 上野千鶴子(2007)「腐女子とはだれか? サブカルのジェンダー分析のための覚え書き」『ユリイカ』2007年6月臨時増刊号、青土社、p.34

と言える。このように一般人の中には「腐女子」と「女子オタク」の区別がつかず、その概念を混同している人も少なくないようである。従って、本章では「腐女子」の定義を辞典や書籍などを通じて明らかにすることにする。

「腐女子」に関する定義に先立ち、その上位概念である「オタク」の概念を定義しておく必要があると思われる。「オタク」という言葉は1970年代後半SF愛好家たちがお互いを「オタク」と呼び始めたのが始まりである<sup>4)</sup>と言われているが、当時はあくまでも相手を呼ぶ呼称としてしか使用されなかった。

「オタク」という言葉が一般大衆に認知され、使用されはじめたのは中森明夫のコラムがきっかけ<sup>5)</sup>であった。コラムニストの中森明夫は1983年『漫画ブリッコ』(白夜書房)誌上に「「おたく」の研究①街には「おたく」がいっぱい」(6月号)、「「おたく」の研究②「おたく」も人並みに恋をする?」(7月号)、「おたく」の研究③「おたく」地帯に迷い込んだで」(8月号)といった3回に至るコラムの連載で身体的魅力に欠けていて趣味に没頭している人たちを「オタク」と称しており<sup>6)</sup>、具体的には身体的特徴、性格および性質、文化と熱中の方向性という三つの観点から論じた。このような「オタク像」を金鎔均・徐慶元(2014)は、「特定の対象に対して、他人からは理解しがたいほど異常なこだわりを持ち、内向的で身体的魅力に欠けている存在<sup>7)</sup>」であるとまとめている。

次に、『日本国語大辞典』では「オタク」を「ある趣味などに凝っていて、他の物事に無関心な若者をいう俗語<sup>8)</sup>」と定義しており、『オタク語事典2』では「特定の趣味に対して多くの時間やお金をかける人のこと。たいていの場合、スポーツなどの広く知られた一般的な趣味ではなく、狭義ではマンガやアニメ漫画やゲームなどに愛着を示す若い世代を指すことが多い。」<sup>9)</sup>と定義している。ところが、「腐女子」も特定の分野に没頭するという点では「オタク」の下位分類に含まれると言えるが、前述した定義だけでは「腐女子」の定義としてはやや不十分である。「腐女子」のライフスタイルについて解説した『腐女子あるある』という本と、「腐女子」に関する用語をまとめた『腐女子語辞典』では「腐女子」を下記のように説明している。

4) 岡田斗司夫(1996)『オタク学入門』太田出版、p.11

5) 金鎔均・徐慶元(2014)「日本大衆文化における「オタク像」—2000年代論者の言説を中心に—」『日本近代学 研究』第44輯、韓国日本近代学会、p.95

6) 相田美穂(2004)「現代日本におけるコミュニケーションの変容—おたくという社会現象を通して」『広島 修大論集』第45巻第1号、広島大学、p.91

7) 金鎔均・徐慶元(2014)、前掲書(5)、p.95

8) 小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典 第二版』第二巻、小学館、p.1188

9) 金田一乙彦(2009)『オタク語事典2』美術出版社、p.9

## 【腐女子】

男性同士の恋愛関係や、それを描いた作品、二次創作物、そういった関係を匂わせたものに強く心を惹かれる女子のこと。<sup>10)</sup>

## 【腐女子】

ボーイズラブをはじめ、男性同性愛を描いた作品や二次創作物、そういった関係を匂わす作品や、男性同士の恋愛関係、行き過ぎた友情などをこよなく愛する女子オタクを指す。<sup>11)</sup>

上記の二つの定義から、「腐女子」とは「女子オタク」の下位分類として主に男性同士の同性愛を描いた作品、即ち、「やおい」や「BL」が好きな女性であると言える。ところが、この定義だと男性同士の出会い・恋愛・セックスという同一テーマを主たる内容としている「ゲイ漫画」との区別がつかない。この二つの相違点について夏目房之介・竹内オサム(2009)は「BL」は書き手も読み手もほとんど女性という特徴があり、「ゲイ漫画」が書き手・読み手が男性であることと対照的である<sup>12)</sup>と主張した。また、次の<図1>のイメージから分かるように、登場人物の場合、「BL」には美的レベルの高い男性が多く登場するが、「ゲイ漫画」はそれとは対照的に短髪で筋肉隆々としたキャラクターが登場するものが多い<sup>13)</sup>という。



<図1>「ゲイ漫画」と「BL」のイメージ比較

以上の考察から、「腐女子」とは「女子オタク」の下位分類として主に女性によって作られた男性同士の恋愛を扱った小説や漫画などを楽しむ女性』であると定義できる。

10) かつくら編集部(2013)『腐女子あるある』新紀元社、p.2

11) かつくら編集部(2013)『腐女子語事典』新紀元社、p.128

12) 夏目房之介・竹内オサム編著(2009)『マンガ学入門』ミネルヴァ書房、p.227

13) 西原麻理(2009)『『ボーイズラブ』のキャラクター造形に関する一考察』『メディア学』24号、同志社大学大学院メディア学研究会、p.18

## 4. 「腐女子」の生態と思想

この章では「腐女子」と呼ばれる人たちがどのように生活し、どのような考えを持っているのか、即ち、「腐女子」の生態と思想を明らかにすることにする。まず、「腐女子」の生態は「都市の変化」という観点から「腐女子の聖地<sup>14)</sup>」と呼ばれる東池袋の「乙女ロード」の成立について考察することにする。次に、「腐女子」が日本大衆文化において大きな市場を形成しているにもかかわらず、何故今までそれほど語られてこなかったのかについても共に考察を行うことにする。また「腐女子」の思想については、嗜好するものや男女「オタク」の差を中心にして「腐女子」がどのような思想を持っているのかを詳細に検証することにする。

### 4.1 「腐女子」の生態

「腐女子の聖地」と言われる「乙女ロード」とは、東京都豊島区東池袋にある通りの通称で、漫画情報誌『ぱふ』の2004年5月号が初出である<sup>15)</sup>と言われている。この通りには200mほどの道路の片側に女性を対象にしたアニメグッズや同人誌、いわゆる「腐女子」を対象にした商品を扱う店舗が密集している。「乙女ロード」の成立は秋葉原が家電の街から「男子オタク」の聖地へと変貌していく過程と類似しているため、まず秋葉原の変貌について言及しておく必要があると思われる。

1980年代まで秋葉原は家電製品の街であったが、1990年代低価格競争に巻き込まれ、多くの家電店は主力商品を家電からパソコンと周辺機器に移していった。ところが、1998年ガレージキットやフィギュアで有名な「海洋堂」がラジオ会館の4階に入ることになり、「萌え」の文化が秋葉原にもたらされた。その後、プラモデルやアニメ専門店なども続々と開店し、秋葉原は徐々に家電の街から「オタク」の街へと変化していった現在に至っている。

前述したように、東池袋の「乙女ロード」に「腐女子」が集まり始めたのも秋葉原の変貌と類似している。バブルの頃に大学生が主に遊ぶ街は渋谷であったが、時代の変化と共に徐々にキャッチセールスや風俗などの勧誘が少なく、物価も比較的安い池袋に移動するようになった。また、1990年代後半に巨大書店である「ジュンク堂」が池袋に出店したことも池袋に女性が集まるようになった大きな理由の一つ<sup>16)</sup>であった。ところが、東池袋が「腐女

14) 斎藤環・酒井順子(2006)『「性愛」格差論—萌えとモテの間で』中央公論新社、p.133

15) 森川嘉一郎(2007)「数字で見る腐女子」『ユリイカ』12月臨時増刊号、青土社、p.134

16) 杉浦由美子(2006b)『腐女子化する世界 東池袋のオタク女子たち』中公新書ラクレ、p.32

子」向けの街に特化されていったのは、2000年に「アニメイト本店」がリニューアルされ9階建てになった頃からである。このような池袋の「女性の集い場」から「腐女子の聖地」への変化は、下記の三つの地域における変化過程で説明することができる。



<図2> 東池袋乙女ロード

「アニメイト本店(①)」が女性向けの傾向を強く打ち出したことがきっかけとなり、東池袋は男女の「オタク」が共存していた状態から「女子オタク」向けに特化した商品展開が目立つようになった。この時期、「男子オタク」は急激に秋葉原に流れていったため、東池袋の各店舗は、女性向け商品を集中的に扱うようになったのである。その後、東池袋は同人志販売店である「K-BOOKS・まんだらけ・らしんばん(②)」のような「腐女子」向けの専門店が立ち並ぶ街に変貌していった。ところで、東池袋が「腐女子の聖地」となった要因は、「オタク」ショップの集合だけではない。「サンシャインシティ(③)」に隣接しているという立地条件も、「腐女子」たちには実に魅力的であった。サンシャインシティは複数のショッピングモールを有するファッションビルの集合体である。「腐女子」は漫画やアニメ、DVDなどを買うためにお金を費やしているため、高級な洋服やバッグは購入しない傾向がある。このような「腐女子」の消費行動と、非高級ファッションモールというイメージのサンシャインシティは相性が良いわけである。また、「男子オタク」と違って「腐女子」は群れをなして行動する傾向が強いため、必然的にどこか集まる場所が必要になってくる。そのようなニーズに応えてくれる小綺麗なカフェやコーヒーショップが多く入店しているサンシャインシティは「腐女子」にとってもってこいの場所であったと言える。このような過程を経て東池袋は着々と「乙女ロード」に変化していったのである。

次は「腐女子」が日本大衆文化において大きな市場を形成しているにもかかわらず、何故



今までそれほど語られてこなかったのかについて検証してみることにする。周知の通り、「腐女子」がメディアに無視されてきた理由には「女性はオタクになりにくい」という誤解があると思われる。斎藤美奈子は『男性誌探訪』で下記のように述べている。

(前略)マニアと呼ばれる人種には、なぜ男性が多くて、女性が少ないのか。これは私の長年の疑問だった。(中略)私が考える環境因子その一は少年少女時代の問題である。趣味の入り口には、その道の先達(多くは大人)がいるのがふつう。父母、叔父叔母、兄姉などなどだ。まずこの時点で第一の選別が行われる。父は息子に釣りを、母は娘に手芸を教えるというように、知識や技術の伝承は同性間に傾く。(中略)次に仲間の問題がある。趣味を持続していくには同好の士が不可欠。仮に少女が父の手ほどき釣りなり鉄道なり父兄の趣味に目覚めたとしよう。ところが、小中学生は同性同士かたまって遊ぶ傾向がある。結果、彼女は男子にはのけ者にされ(るわりには大人の男たちには不必要にちやほやされ)、女子の中には同好の士が見つからない。よほどの意思がない限り、この段階で脱落する女性が多いのではないか。それでなくとも10代になって色気づく、女の子はラクで楽しいおしゃれや恋愛に流れちゃうしね。男をとるか趣味をとるかとなったら、彼女はきっと男をとるのだ。17)

上記の斎藤の主張から、今まで「女性はオタクになりにくい」という偏見が強かったことが分かる。しかし、『週刊新潮』によると、日本国内に「BL」に読み耽っている「腐女子」は10万人もいる<sup>18)</sup>という。また、同人誌即売会「コミックマーケット1」の場合、参加者の90%が少女マンガファンの女子中・高校生であり<sup>19)</sup>、以後しばらくはこの状態が続いたという。このように「男子オタク」より多く存在すると思われる「腐女子」たちは何故今までメディアに注目されなかったのか。その要因の一つにルックスだけでは「オタク」か「非オタク」か判断がつかないということがある。「男子オタク」と違って「腐女子」は常識レベルのお洒落や清潔さを保って平日は地道に生活している人が多いため、外見だけでは「腐女子」と「非オタク女子」は見分けがつかないのである。また、「腐女子」が閉じているのは「BL」好きの趣味の世界だけであるという点も要因の一つである。趣味以外の部分では一般人のように学校に通い、就職し、恋愛や結婚をし、普通に生活しているのである。「腐女子」の多くは大人の女性で愛の意味が色褪せている現実世界をそのまま受け入れて生きている。従って、「腐女子」たちは現実の社会では色々と妥協しつつ恋愛や結婚をし、それに疲れると妄想の世界に行って休み、また現実に戻ってくる<sup>20)</sup>のである。

17) 斎藤美奈子(2003)『男性誌探訪』朝日新聞社、pp.214-215

18) 週刊新潮(2010)『週刊新潮』新潮社、pp.31-32

19) 杉浦由美子(2006b)、前掲書(16)、pp.26-27

## 4.2 「腐女子」の思想

この節では「腐女子」が嗜好するものや妄想などについて考察することにする。まず、「腐女子」が嗜好するものと言えば男性同士の同性愛を描いた「やおい」や「BL」である。これらは基本的に「同人誌」という形で販売されているが、ここでも男女の差が見られる。男性向けの多くの「同人誌」は異性間の性行為が中心となる。一方、「腐女子」の場合は、原作のテキストでは描かれることのない男性の登場人物同士の恋愛関係を描く型の「同人誌」が多い<sup>21)</sup>という。これは異性でなく「男同士」なら、色々な状況をシミュレーションできる面白さがあるためであると思われる。このような点で「男子オタク」にとってのアニメや漫画の美少女キャラクターへの萌えや妄想は、「現実で満たされない性欲の代償行為」であると言えるが、それに比べて「腐女子」の場合は多くが「非オタク」の女性同様に恋愛やセックスを楽しんでいることから、「腐女子」にとって妄想や萌えは単なる息抜きに過ぎなく、決して現実の代償行為ではない<sup>22)</sup>と言える。

「腐女子」が「BL」を好んで読む理由としては、物語の有無、感情移入のやすさ、女性性の維持などが挙げられる。「腐女子」は男性同士の同性愛を嗜好することで女性性を否定しているわけではなく、ただ「物語」を求めている。男性向けの「同人誌」ではセックスはあっても物語的要素は少ない。ところが、「腐女子」向けの作品の場合は、これでは通用せず、必ず何らかの物語がなくてはならない。「腐女子」はあくまでも「物語」の中に性的描写が入っていることを求めるのである。結局、女性が求めるのは「恋愛の物語」<sup>23)</sup>であると言える。

次に、感情移入のやすさと女性性の維持も「腐女子」の「BL」嗜好に欠かせない要素である。多くの恋愛物語は主人公となるカップルが必ず存在する。たとえ三角関係が展開しても、カップル以外はいくまでも添え物にすぎない存在である。読者である女性は主人公の「彼女」に自分を置き換えて読み進めるが、物語の「彼」はあくまで物語の「彼女」のことを見ているに過ぎず、決して読者を見ているわけではない。それに対して、「BL」には女性がほとんど登場しない。それに、主人公のカップルはどちらも自分の「彼」になるわけで、両方に感情移入することも可能である。また、女性が登場しない「BL」は主人公の「彼女」として自分が汚されることもなく、客観的に傍観できる。このような心理があるが故に、「腐

20) 杉浦由美子(2006a)『オタク女子研究 腐女子思想大系』原書房、p.42

21) 岡部大介(2008)『腐女子のアイデンティティ・ゲーム：アイデンティティの可視/不可視をめぐって』『認知科学』Vol.15 No.4、日本認知科学会、p.673

22) 杉浦由美子(2006a)、前掲書(20)、p.99

23) 杉浦由美子(2006b)、前掲書(16)、p.122

女子」は「BL」が好きであると思われる。

5. 日本大衆文化における「腐女子」の市場性

この章では日本大衆文化における「腐女子」の市場性について考察してみることにする。その具体的な方法として「オタク」市場の規模と、「同人誌」即売会である「コミックマーケット」における「腐女子」市場を分析資料として選定して分析を行った。

まず、「オタク」市場の人口および市場規模に関する研究には野村総合研究所が実施したインターネットアンケート調査の結果がある。10,002サンプルを基にした「趣味やこだわりに関する生活者調査」によると、「オタク」市場は12カテゴリーに分けることができるという。各分野の人口と市場規模を表でまとめたのが下記の<表1>である。

<表1>「オタク」市場の人口と市場規模<sup>24)</sup>

| 分野      | 人口    | 市場規模    |
|---------|-------|---------|
| コミック    | 35万人  | 830億円   |
| アニメ     | 11万人  | 200億円   |
| 芸能人     | 28万人  | 610億円   |
| ゲーム     | 16万人  | 210億円   |
| 組立PC    | 19万人  | 360億円   |
| クルマ     | 14万人  | 540億円   |
| AV機器    | 6万人   | 120億円   |
| ITガジェット | 7万人   | 80億円    |
| 旅行      | 25万人  | 810億円   |
| ファッション  | 4万人   | 130億円   |
| カメラ     | 5万人   | 180億円   |
| 鉄道      | 2万人   | 40億円    |
| 合計      | 172万人 | 4,110億円 |

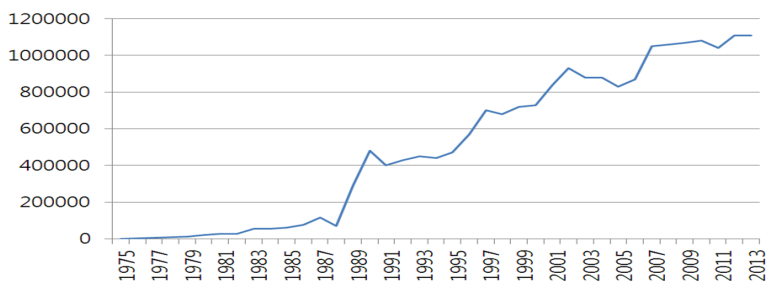
<表1>の分析結果から分かるように、典型的な「オタク像」として認知されているのは「

24) 野村総合研究所(2005)『オタク市場の研究』東洋経済新報社、p.52

コミックオタク」である。「コミックオタク」について野村総合研究所は「コミックやその登場人物に対して強い愛着を持ち、所有・収集・情報収集に対して、所得または余暇の大部分を費やす層。またコミックの登場人物に関連するグッズなどの購入や自作の表現活動も対象となる<sup>25)</sup>」と定義している。その下位分類としては「作品中心主義系」「収集系」「同人誌系」「フィギュア系」「コスプレ系」があり、その内、自己表現の手段としての表現活動、即ち「同人活動」をする層は広がりつつあるという。このような傾向は世界最大の同人誌即売会「コミックマーケット」の1975年から2013年までの参加者数と年度別の推移からも分かる。その推移は次の通りである。

<表2> コミックマーケット参加者数の年度別の推移

| 年度   | 1975    | 1976    | 1977      | 1978      | 1979      | 1980      | 1981      | 1982      | 1983      | 1984    |
|------|---------|---------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|
| 参加者数 | 700     | 1,750   | 5,800     | 8,000     | 11,000    | 20,000    | 27,000    | 27,000    | 56,000    | 55,000  |
| 年度   | 1985    | 1986    | 1987      | 1988      | 1989      | 1990      | 1991      | 1992      | 1993      | 1994    |
| 参加者数 | 60,000  | 75,000  | 115,000   | 70,000    | 290,000   | 480,000   | 400,000   | 430,000   | 450,000   | 440,000 |
| 年度   | 1995    | 1996    | 1997      | 1998      | 1999      | 2000      | 2001      | 2002      | 2003      | 2004    |
| 参加者数 | 470,000 | 570,000 | 700,000   | 680,000   | 720,000   | 730,000   | 840,000   | 930,000   | 880,000   | 880,000 |
| 年度   | 2005    | 2006    | 2007      | 2008      | 2009      | 2010      | 2011      | 2012      | 2013      |         |
| 参加者数 | 830,000 | 870,000 | 1,050,000 | 1,060,000 | 1,070,000 | 1,080,000 | 1,040,000 | 1,110,000 | 1,110,000 |         |



<図3> コミックマーケット参加者数の年度別の推移

上記の<表2>と<図3>で分かるように、「コミックマーケット」の参加者数は年々増加している。具体的には70年代は合計2万7250名であったが、80年代79万5千名、90年代534万

25) 野村総合研究所(2005)、前掲書(24)、p.55

名、2000年代以降は1348万名に上っている。矢野経済研究所がまとめた『「オタク」市場に関する調査結果2012<sup>26)</sup>』によると、2011年度の「BL」は年間216億円の市場を形成しており、2010年の220億円よりは若干減少したものの、一定の需要は維持しているという。このことから、日本大衆文化における「BL」への需要は当分の間は巨大産業としての命脈を保つと思われる。

## 6. おわりに

本稿では「腐女子」と呼ばれる人たちの属性を概念、生態、思想、市場性といった四つの観点に分けて考察を進めてみた。考察を通じて明らかになったことを再度まとめると、次のようになる。

1. 「腐女子」とは「女子オタクの下位分類として主に女性によって作られた男性同士の恋愛を扱った小説や漫画などを楽しむ女性」であると定義できる。
2. 「腐女子」は常識レベルのお洒落や清潔さを保って平日は地道に生活している人が多いため、外見だけでは「腐女子」と「非オタク女子」は見分けがつかない。また、「腐女子」が閉じているのは「BL」好きの趣味の世界だけであり、それ以外の部分では一般人同様に生活しているため、「腐女子」は「男性オタク」に比べてそれほど目立たないと思われる。
3. 「腐女子」は男性同士の同性愛を描いた「やおい」や「BL」を嗜好しており、「男性オタク」とは違って「腐女子」における妄想や萌えは単なる息抜きに過ぎなく、決して現実の代償行為ではないと言える。
4. 「腐女子」に関連する産業は現在横這い状態であるが、一定の需要があるため、当分の間は巨大産業としての命脈を保つと思われる。

上記のような四つの特徴が全ての「腐女子」を代弁するとは言いがたいが、現在の「腐女子像」を垣間見ることができるという点で、それなりに有意義な考察結果であると言える。本稿では「腐女子」を概念、生態、思想、市場性といった四つのカテゴリーに焦点を当てて考察してみたが、具体例を通じた「腐女子」の分析や、「男子オタク」との比較・対照研究は今後の課題にしたい。

26) <http://www.yano.co.jp/press/press.php/001002>(検索日：2014年12月20日)

# 【參考文獻】

- 金鎔均·徐慶元(2014)「日本大衆文化における「オタク像」—2000年代論者の言説を中心に—」『日本近代学研究』第44輯、韓国日本近代学会
- キムヒョジン(2010)「후조시(腐女子)는 말할 수 있는가?: ‘여자’ 오타쿠의 발견」『日本研究』第45号、韓國外国語大学校 日本研究所
- 相田美穂(2004)「現代日本におけるコミュニケーションの変容—おたくという社会現象を通して」『広島修大論集』第45卷第1号、広島修道大学
- \_\_\_\_\_(2013)「期待される腐女子像からのエクソダス—「可能性」の読み込み/誤読に関する一考察—」『広島修大論集』第54卷第1号、広島修道大学
- 上野千鶴子(2007)「腐女子とはだれか? サブカルのジェンダー分析のための覚え書き」『ユリイカ』2007年6月臨時増刊号、青土社
- 岡田斗司夫(1996)『オタク学入門』太田出版
- 岡部大介(2008)「腐女子のアイデンティティ・ゲーム：アイデンティティの可視/不可視をめぐって」『認知科学』Vol.15 No.4、日本認知科学会
- かつくら編集部(2013)『腐女子語事典』新紀元社
- かつくら編集部(2013)『腐女子あるある』新紀元社
- 金井淑子(2008)『身体とアイデンティティ・トラブル ジェンダー / セックスの二元論を超えて』明石書店
- 金田一乙彦(2009)『オタク語事典2』美術出版社
- 斎藤環・酒井順子(2006)『「性愛」格差論—萌えとモテの間で』中央公論新社
- 斎藤美奈子(2003)『男性誌探訪』朝日新聞社
- 週刊新潮(2010)『週刊新潮』新潮社
- 小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典 第二版』第二卷、小学館
- 杉浦由美子(2006a)『オタク女子研究 腐女子思想大系』原書房
- \_\_\_\_\_(2006b)『腐女子化する世界 東池袋のオタク女子たち』中公新書ラクレ
- 田原歩美(2012)「『腐女子』の性的自己決定について」『福山大学こころの健康相談室紀要』第6号、福山大学
- 西原麻理(2009)「『ボーイズラブ』のキャラクター造形に関する一考察」『メディア学』24号、同志社大学大学院メディア学研究会
- 夏目房之介・竹内オサム編著(2009)『マンガ学入門』ミネルヴァ書房
- 野村総合研究所(2005)『オタク市場の研究』東洋経済新報社
- 森川嘉一郎(2007)「数字で見る腐女子」『ユリイカ』12月臨時増刊号、青土社

---

논문투고일 : 2014년 12월 10일  
 심사개시일 : 2014년 12월 20일  
 1차 수정일 : 2115년 01월 08일  
 2차 수정일 : 2015년 01월 14일  
 게재확정일 : 2015년 01월 19일

---

## 〈要旨〉

### 日本大衆文化における「腐女子」に関する一考察

本稿は「腐女子」と呼ばれる人たちの属性を概念、生態、思想、市場性といった四つの観点に分けて考察した研究である。考察を通じて明らかになったことをまとめると、次のようになる。

1. 「腐女子」とは「女子オタクの下位分類」として主に女性によって作られた男性同士の恋愛を扱った小説や漫画などを楽しむ女性であると定義できる。
2. 「腐女子」は常識レベルのお洒落や清潔さを保って平日は地道に生活している人が多いため、外見だけでは「腐女子」と「非オタク女子」は見分けがつかない。また、「腐女子」が閉じているのは「BL」好きの趣味の世界だけであり、それ以外の部分では一般人同様に生活しているため、「腐女子」は「男性オタク」に比べてそれほど目立たないのである。
3. 「腐女子」は男性同士の同性愛を描いた「やおい」や「BL」を嗜好しており、「男性オタク」とは違って「腐女子」における妄想や萌えは単なる息抜きに過ぎなく、決して現実の代償行為ではないと言える。
4. 「腐女子」に関連する産業は現在横這い状態であるが、一定の需要があるため、当分の間は巨大産業としての命脈を保つと思われる。

### Thoughts on the role of 'Fuzyosi' in Japanese Popular Culture

This paper investigates a group of people called 'Fuzyosi' from conceptual, lifestyle, ideological, and market value perspectives. The findings are as follows:

1. 'Fuzyosi' are a sub-class of 'Female Otakus', and they can be defined as 'women who enjoy novels or manga, usually also composed by women, with gay themes.
2. Because 'Fuzyosi' maintain a reasonable level of social sophistication and cleanliness and have a normal work life, they are indistinguishable from 'non-otaku women'. Moreover, their world of 'BL (Boys Love)' is the only thing they are hiding, which makes them less conspicuous compared to their male otaku counterparts.
3. 'Fuzyosi' enjoy reading 'Yaoi' or 'BL' which are works with male homosexual themes. However, unlike for the male otakus, for the 'fuzyosi' this is merely a pastime.
4. The 'Fuzyosi' industry is current stagnant, but it is likely to maintain its status as a sizeable industry because of the constant nature of the demand.